

東野圭吾

第31回江戸川乱歩賞受賞作

放課後



東野圭吾

江戸川乱歩賞受賞作

課後

放課後

昭和六十年九月十日 第一刷発行
昭和六十年十月十一日 第三刷発行
定価 一〇〇〇円

著者 東野圭吾

発行者 野間惟道

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二二／郵便番号一―二―
電話・東京(〇三三)九四五―一―一一(大代表)

印刷所 株式会社廣済堂

製本所 黒柳製本株式会社

©東野圭吾 一九八五年 Printed in Japan
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えます。

ISBN4-06-202342-3 (0) (文2)

放
課
後

装帧 水田秀穗

第一章

1

九月十日、火曜日の放課後。

コトリと頭上で音がした。反射的に顔を上げると、三階の窓から何か黒い物が放り出されるのが見えた。私の真上だ。あわてて身をよける。黒い物体は、今私が立っていた地点に落下すると、ぐしゃりと潰れた。

それはゼラニウムの鉢植えだった。

放課後、校舎のそばを歩いている時の出来事である。どこからかピアノの音が流れて来ていた。私はほんの少しの間、その素焼の鉢を呆然と見つめていた。一瞬何が起ったのか理解できない状態にあった。ふっと我に返ったのは、脇の下に湧いた汗がたらりと腕を伝わった時だ。

次の瞬間、私は駆け出していた。校舎に飛び込むと全力で階段を駆け上る。

息をきらせて三階の廊下に立った。鼓動が激しいのは走っただけではない。恐怖が今頃になった。ピークに達してきたからだ。あの一撃をまともに喰っていたら——ゼラニウムの赤い色がふいに蘇った。

あの窓の位置から察するほどの教室になるか？ 私の足は理科実験室の前で止まった。中からは薬品臭い空気が漏れている。ふと見ると戸が五センチばかり開いていた。

私は勢いよく戸を開けた。同時に心地よい微風が流れてくる。正面の窓が開いていて、白いカーテンを揺らしていた。

私は再び廊下を進んだ。鉢植えが落とされてから、私がここへ駆け上ってくるまでどれくらいの間があったかは覚えていない。だが私は廊下の両側に並んでいる教室のどこかに、鉢植えを落とした人間が隠れていそうな気がするのだった。

校舎は途中でL字型に曲がっている。その曲がり角を過ぎた時、私は足を止めた。二年C組と札のかかっている教室から話し声が聞えたのだ。私は迷わず戸を開いた。

そこに居たのは五人の生徒だった。窓際に集まって何か書きものでもしていたらしい。彼女達は突然の侵入者に驚き、いっせいにこちらを見た。

私は何か喋らざるを得なくなつた。

「何をしているんだ？」

すると一番手前に居た生徒が答えた。

「文芸部で……詩集を作っているんです」

はつきりとした口調だ。邪魔をするなどとも言いたげ。

「誰かこちらへ来なかったか？」

五人は顔を見合せた後、首を振った。

「廊下を歩いた者も居ないか？」

彼女達は再びお互いの顔を見合せた。「居なかったわよねえ」と小さい声でつぶやくのが聞える。やがて先程の生徒が代表するように、「気づきませんでした」と答えた。

「そう……有難う」

私は教室の中を見回した後、戸を閉めた。

その頃になってようやくまたピアノの音が耳に入ってきた。そういえば先刻さつきからずっと聞えていたようだ。クラシックなどともに知らない私だが、聞いたことのある曲だ。おそらくなかなかの腕前だろうとも思った。

一番奥に音楽室がある。音色はそこから流れてくるのだ。私は教室の戸を片っ端から開き、誰か居ないかどうか確かめていく。そして最後に残ったのがその音楽室だった。

私は乱暴にその戸を開けた。穏やかな水の流れを乱し、美しい構築物をぶち壊しにするような雑音だ。ピアノの音は息を詰めたように止まった。

弾き手が脅えたように私の顔を見ていた。見覚えがある。二年A組の生徒だ。色白の肌が印象的だが、今はやや蒼ざめている。私は思わず「すまない」と発していた。

「ここへ誰か来なかったかい？」

室内を見回しながら尋ねる。長椅子が三列に並んでいる。窓際に古びたオルガンが二つ。壁には音楽界に功績を残した有名な作曲家達の肖像画がかけられている。隠れる場所は無いな、と判断する。

彼女は何も言わずに首を振った。彼女が弾いていたのはグランドピアノだ。結構古いものらしい。

「そうか……」

私は彼女の後ろを回って、窓際に歩み寄った。校庭でクラブの連中が走っているのが見える。

校舎の階段は、この音楽室を出てすぐ左に行ったところにもある。おそらく犯人はそこから逃げたのだろう。それだけの時間は充分にあったと思う。問題はそれが誰か——だが……。

私はピアノの彼女がじっと私を見ていることに気づいた。不安そうな顔つきだ。私は笑顔をつくって言った。

「演奏を続けてくれよ。少し聴いていたいんだ」

彼女はそれでようやく表情を柔らげ、ちらと楽譜に目を落とした後、しなやかに指を動かした。静かにもりあがる調べ……そうだシヨパンだ。私でも知っている有名な曲だ。

窓の外を眺めながらシヨパンを聴く——思いがけない優雅な時間。だが私の気分はすぐれない。心は依然としてブルーだ。

私が教師になったのは今から約五年前。特に教育に興味があつたわけでもないし、この職業にあこがれていたわけでもない。一口で言ってしまうと「成行き」ということになる。

地元の国立大工学部の情報工学科を卒業した私は、某家電メーカーに就職した。本社が地元にあることが選択の理由の一つだったが、配属されたのは信州の方にある研究所だった。しかし、仕事の内容は光通信システムの開発設計で、まずまず自分の希望通りと言つてよかった。私はその仕事に三年間従事した。

転機が訪れたのは四年目だった。東北に新工場が建てられ、光通信システムの開発員の大半がそちらの方に移ることになったのだ。勿論私も、である。私は迷った。東北はあまりにも遠いイメージを

持っていた。山奥で一生を終えることになるかもしれないという、先輩社員の冗談とも本気ともとれる言葉も不気味だった。

転職を考えてみた。他の企業に再就職するか、公務員になるか。だがどの道も簡単には開けそうになかった。観念して東北に行くしかないか——そう諦めかけた時、私に教師になることを勧めたのは母親だった。私は大学在学中に数学教師の資格を取得していたのだが、それを生かさぬのは勿体ない（もったいない）のである。勿論母にしてみれば、息子を東北などという遠隔地へ行かせたくないという気持ちもあつたのだろうが、実際教師というのは、給与という点から見ても、その頃の収入に較べて決して悪い職業ではなかった。

だが教員の採用試験はそう簡単に受かるものではない。私がそういうと、母は、私立高校なら何とかなるかもしれないと言った。亡父が私学協会にそれなりの筋を持っていたらしいのだ。

特にやりたい仕事でもないが嫌う程でもないというのが、私の教師という職業に対するイメージだった。年老いた母親が熱心に勧める話を断ってまで、やりたいという希望の職があつたわけでもない。結局、私はその話に乗ることにした。とりあえず二、三年やってみるかという、軽い気持ちだったのだ。

正式に辞令を手にしたのは翌年三月だ。

私立清華女子高等学校——それが私の次なる職場の名前だった。

その高校はS駅を降りて五分、団地と田んぼに囲まれているという、奇妙な環境にあつた。生徒数は一学年三百六十名、四十五名のクラスが八つある。二十年以上の伝統を持つ上に、まずまずの進学率を維持しているため、県下の女子高の中ではトップクラスと言ってよい。事実、私が「清華女子高の教師になる」と知人に話すと、誰もが「いいところに決まったな」と祝福してくれるのだった。

会社に辞表を出した私は、その四月から早速教壇に立った。一番最初の授業のことは、克明に覚えていた。たしか一年生のクラスだった。自分もこの学校に來たばかりで、新入生同士云々といった自己紹介をした筈だ。

最初の授業を終えた時、私は早くも教師という職業に対して自信を失いかけていた。特に失敗をやらしたわけでも、生徒の扱いに困ったわけでもない。私は彼女達の視線に耐えられなかったのだ。私は自分のことを人に注目されるような人間だとは思っていない。どちらかといえば人の陰に隠れている方だ。ところが学校の教師という仕事はそういうわけにはいかなかった。生徒は自分が発する一言一言に反応し、一挙手一投足に注目する。私は授業の間中、百近い眼に見張られて（びやう）いるような気がするのだった。

彼女達の視線に慣れてきたのは二年程前からである。神経がず太くなつたのではない。生徒達は、それほど教師というものに興味を持っていないということに気づいたからだつた。

だが、彼女達の気持ちは全く理解できていない。

とにかくもう驚かされることの連続である。大人かと思えば意外に子供だったり、かと思えば大人顔負けの問題を起したり、一度たりとも彼女達の行動を予測できたためしはない。それは一年目も五年目も殆ど変っていないのだ。

生徒達だけではなく、学校の教師という人種も、違ったコースを歩んできた私には別の生き物に見える場合が少なくない。生徒をしめつけるために、無意味な労力を（えんえん）蜿蜒と使い続けたり、目の色を変えて服装や身だしなみのチェックをする神経は、どうしても私には理解できないのだ。

学校というところは分らないことが多すぎる——これがこの五年間の感想だ。
だが実は、最近一つだけはつきりと分っていることがある。

それは、私のまわりに私を殺そうとする人間が存在するということだ。

私はその殺意に気づいたのは、三日前の朝だった。場所はS駅プラットホーム。満員電車から吐き出され、群衆に流されるようにしてホームの端を歩いていたら、ふいに横から突かれた。突然のことではバランスを失い、外側に一、二歩よろけた。体勢を立て直したのは線路に落下する寸前のところだ。あと十センチも無かったと思う。

あぶないな、一体誰だ——そう思った直後、戦慄が私の身体を突き抜けた。私が落ちそうになった線路を急行列車が通過して行ったのだ。

心が凍った。

こい

私は確信する。誰かが故意に突いたのだ。タイミングを計り、私が油断するのを待って……。

だが一体誰が？ 残念ながらその群衆の中で犯人を見つけ出すのは最早不可能だった。

二度目の殺意を感じたのは昨日だ。水泳部の練習が休みだったので、私はプールで一人泳いでいた。泳ぐのは好きだ。

五十メートルを三往復ほどした後水から上った。アーチェリー部の方をコーチしなければならぬからあまり疲れるわけにはいかない。

焼けついたプールサイドで整理体操をした後、シャワーを浴びた。九月と言っても連日の猛暑だ。シャワーの水はこの上なく爽快であった。

それに気づいたのは、身体を洗い終って水を止めた時だった。それは私の足元から一メートルほど離れた所に落ちていた。いや、足首まで水がたまっていたから沈んでいたというべきか。拳ぐらゐの大きな白い小箱に見えた。顔を近づけてじっくり観察してみる。直後、私はシャワー室から飛び出していった。

それは百ボルトの家庭用延長コードの先端だった。白い小箱に見えたのは、テーブル・タップである。そしてコードのもう一方は、更衣室のコンセントにつながれていた。

プールに入る前は勿論こんなものは無かった。ということは、私が泳いでいる間に誰かが仕掛けたということになる。何のために？ 答えは明白だ。感電死を狙ったに違いない。

それにしても何故無事だったのだろうか？ 私はもしやと思って電源ボックスを見に行った。すると予想通りノーフューズブレーカーが落ちていた。水の中で電流が流れ過ぎて、ブレーカーの容量をオーバーしたのだ。だがもしもっと容量の大きなブレーカーだったとしたら——私は寒気を感じた。そして三度目が先刻のゼラニウムの鉢だ。

今まで私は三度とも運良く助かっている。だがいつまでも幸運が続くとは限らない。いずれ犯人は思いきった手に出てくるだろう。それまでにこちらが犯人の正体をつかまねばならない。

容疑者は学校という名の集団。得体の知れない人間達の集団だ。

2

九月十一日、水曜日。

一時限目は三年C組、進学希望者のクラスだ。二学期に入ってからややそわそわし出したのが就職組、多少身を入れて授業を聞くようになったのが進学組だ。

ガラリと戸を開けると、騒がしく椅子を動かす音がして、数秒後には全員席についた。

「起立」

級長の声が響いて白いブラウス姿が立ち並ぶ。礼、着席の後、またひとしきり教室中がざわめい

た。

私はすぐに教科書を開く。教師の中には授業に入る前に雑談をする者もいるらしいが、私には到底真似できない。決まったレール通り喋るのでさえ苦痛なのに、何故余分なことを話せるのだろうか？ 数十人に注目されながら喋ることを苦痛と感ぜない——それは一つの才能だと思う。

「五十二ページから」

乾いた声で言う。生徒達も最近では私がどういう教師か分ってきたらしく、何も期待していないようだ。数学の授業に関すること以外は喋らない——ということから、「マシン」というあだ名がつけられていることも知っている。ティーチング・マシンの略らしい。

左手に教科書を、右手にチョークを持って授業を始める。三角関数、微分、積分……彼女達の何パーセントが私の授業を理解しているのか甚だあやしい。私の言葉に頷き、頻りにノートを取っているからといって、理解しているとは限らないのだ。テストのたびに裏切られる。

授業が三分の一程過ぎた頃だった。教室の後ろの戸が突然開いた。生徒全員がその方を見る。私もチョークの手を止めてそちらを見た。

入って来たのは高原陽子だった。彼女は全員の視線を受け止めながら、ゆっくりと歩き出した。目は左端の一番奥にある自分の机に向けられたままだ。勿論私の方など見向きもしない。静寂の中、彼女の靴音が響いた。

「次に置換法による不定積分のやり方だが……」

高原陽子が席に座るのを見届けてから、私は授業を再び始めた。空気が張りつめているのが分る。陽子は三日間の停学処分を喰っていた筈だった。喫煙が見つかって、ということだが詳しい話は知らない。ただ今日が最初の登校日だということは三年C組担任の長谷という教師から聞いていた。と

ころが一時限目が始まる前、その長谷が私に言った。

「さっき出席を取ったのですが、高原が来とらんのですよ。また無断欠席じゃないかと思うんですが、もし遅刻で先生の授業の途中で入ってくるようでしたら、こっぴどく叱しってやってください」

「叱るのは苦手なんですよ」私は本心を言った。

「そんなこと言わずにお願いしますよ。先生は高原が二年の時担任だったんでしょ？」

「まあそうです」

「だったらひとつ……」

「仕方ないですね」

そう答えたが、私は長谷との約束を守る気は全く無かった。勿論自分で言ったように叱るのが苦手だという理由もある。だが実はそれ以上に高原陽子という生徒が苦手なだった。

彼女が昨年私が担任だった二年B組の生徒だというのは本当だ。だが今ほど問題児だったわけではない。ただ精神的にも肉体的にも少し「進んだ」生徒ではあった。

あれは今年の三月、終業式が終わった後だった。

「二年B組の教室に来て下さい」

帰宅するつもりで机に戻った私は、かばん鞆の上にこう書かれた紙きれを見つけた。名前は書いていなかったが、なかなか丁寧な字だ。私は誰に何の用で呼び出されたのか全く見当がつかぬまま無人の廊下を歩き、教室の戸を開いた。

待っていたのは陽子だった。彼女は教壇の机にもたれかかるような格好で、こちらに顔を向けた。

「ヨーコか、俺を呼び出したのは？」

尋ねると彼女は無表情のまま頷いた。

「何の用だ。数学の成績に不満でもあるのか？」

私はあまり言い慣れない冗談を言った。しかし陽子はそんなものは無視して、

「先生に頼みがあるんだ」

と言って、右手で何か白い物を差し出した。封筒だった。

「何だ、手紙？」

「じゃない。中を見て」

言われて封筒の中をのぞくと電車の切符らしいものが入っていた。取り出してよく見ると、三月二十五日九時発の特急乗車券だった。行先は長野になっている。

「信州に行くんだけど、先生につき合って欲しいってわけ」

「信州？ 他に誰が行くんだ？」

「誰も。二人だけ」

世間話でもするような軽い調子で陽子は答えた。だがその顔つきはこちらがはっとするほど厳しかった。

「驚いたな」

私はわざと大袈裟な表情をして見せた。

「何故俺、なんだ」

「さあ……あたしにも分んない」

「何故信州なんだ？」

「ただ……何となく。それより、行ってくれるでしょ」

陽子の決めてかかったような言葉に、私は首を振った。「どうして？」と彼女は意外そうに言った。

「特定の生徒とそういう事はしないきまりだ」

「特定の女とは？」

「えっ？」
「面喰^{めんくら}って私は彼女の顔を見た。」

「まあいいわ。三月二十五日、あたしM駅で待ってるから」

「だめだよ、俺は行けないよ」

「来てよ。待ってるから」

陽子は次に私が喋ろうとするのを待たず、すたすたと歩き出した。そして教室の入口の所で振り返ると、

「でないと一生恨むから」

と言って、廊下を突然走り出した。私は封筒に入った切符を持ったまま教壇に立っていた。

三月二十五日が来るまで私は随分迷った。無論彼女と旅行する気など毛頭なかった。迷っていたのは、当日どういう行動をとるべきか——である。つまり全く無視して待ち呆^{ぼろ}けを喰^くわせるか、一応駅に行って説得にあたるか、だ。だが陽子の気性から考えて、当日素直に納得するとは思えなかった。それでやはり駅には行かないことにした。なあに、一時間も待てば諦めて帰るだろうとタカをくくっていたのだ。

当日は流石^{さすが}に落ち着かなかった。朝から時計ばかり見てしまう。針が九時を回った時には、どういうわけか大きなため息をついたりした。随分長い一日だった。

その夜の八時頃、電話のベルが鳴った。受話器を取ったのは私だった。

「前島ですが」

「……………」